

農業の窓から見た自然の移り変わり

Part II

眞田三郎（鴨川市）

1996年12月から18年間に亘り、調査を継続して投稿いただいています。今までの原稿をPDFに纏めて、画面でみられるように掲載しました。古い印刷原稿からスキャニング編集をして、画質を落ししたので、読みにくいところがあります。掲載容量のため、2部に分けました。

Part I : 1996年12月、1998年7月、1999年7月、2000年9月、
2001年3月、2002年3月、2003年3月、2004年3月、

Part II : 2005年5月、2006年5月、2007年3月、2008年3月、
2009年5月、2010年5月、2011年5月、2012年5月、
2013年3月、2014年5月

農業の窓から目撃動物を通して見た自然の移り変わり

真田三郎 (鴨川市)

113号よりの続き

II 目立つ変化

また、なりを潜めていたフクロウの独特なゴロツホ ゴロツホ ホーホー ゴロツホ ホーホという鳴き声が家の近くの森で3月28日を皮切りに、5月4回、6月2回聞かれた。そのほか、二毛作田内の菜花を片づけ中、突然クイナ1羽がクツクツと鳴きながら跳びだし排水路の草むらに逃げ込んだことである。

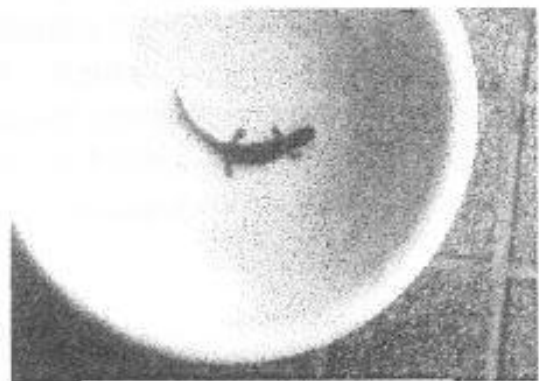
特例として、12月4日夜から5日朝にかけて、発達した低気圧の影響で県内各地が激しい暴風雨に見舞われた。そのとき約3haの堰ほぼ全面に水鳥が避難しているのが目撃され、落ち着くと同時に、いずこへか飛び去った。なお、チョウゲンボウとタシギは昨年同様飛来している。

3. ヒバカリの急増と姿を潜め続けるアオダイショウ・シマヘビ

目撃された爬虫類は、4月から11月まで、ヤマガカシ、ヒバカリ、ジムグリ、マムシ、トカゲ、カナヘビである。そのなかで、ヤマガカシとヒバカリが圧倒的に多く、昨年最も多かったジムグリが激減したことが特筆される。しかし、アオダイショウとシマヘビが引き続き見当たらなかった。

4. トウキョウサンショウウオの新産地

両生類の常連は、ニホンアマガエル、ニホンアカガエル、ヤマアカガエル、ウシガエル、イモリである。ビッグニュースは、3月2日に水田を耕起中、予期せぬトウキョウサンショウウオ1匹を発見、捕獲し家に持ち帰り、確認するとともに、雌雄の判別と体長を測定した。その結果、体長11.5cmの雌で、撮影し、翌3日に同地に放した。そのほか、場外編として既報の嶺岡山地平塚・小原勲氏によると、モリアオガエルの産卵とアズマヒキガエルの蛙合戦は例年通り展開され、カジカガエルは台風による土砂災害のため、消息を断ったとのことである。



トウキョウサンショウウオ

5. 昆虫類の減少

セミ類の出現順は、ニイニイゼミ、クマゼミ、アブラゼミ、ヒグラシ、ミンミンゼミ、ツクツクボウシで昔と変わらない。初鳴きは6月29日、終鳴きは10月14日で、最盛期には複数種がダブルため鳴き声はすさまじく、前年に比べ、天候のためか、初鳴日は約2週間早く、終鳴日は約2週間遅い。トンボ類は少なく、シオカラトンボが主体で、初見が7月1日、終見は9月24日で、他はあまり変わらない。バッタ類は少なく、おもにオンブバッタ、ショウリョウバッタ、トノサマバッタ、コバネイナゴ、クサキリ、カマキリで、オンブバッタが目立ち、初見は7月12日で、終見は11月22日である。ハチ類はコガタスズメバチ、アシナガバチ、クマバチ、ハナバチである。コガタスズメバチは物置軒下の最も安全なところに営巣し、自然度を示す指標動物アシナガバチがきわだち、養蜂業者が来なかったため、ミツバチが激減したことが特筆される。そのほか、チョウ類は数も少なく周年のモンシロチョウ、モンキチョウを中心に種類はほとんど変わらない。

Ⅲ. 目撃動物と自然環境

一般に、生息動物の種数と個体数は減少傾向にある。動物を取り巻く自然環境は、植生をみても、山林の植栽、更新、手入れの放置で、最近、竹類の増殖がめざましく単純化の一途をたどっている。また、季節、作物の早・中・晩生の壁がくずれている。それに伴って、生息動物も変化している。そのなかで、ニホンザルの出没は、開発で生息圏が侵害され、元来、餌になるナラ・ブナ類などに豊凶の波があるのに加え、里山の荒廃と過疎化・高齢化によってヒトの生活圏内に侵入が容易で、そのうえおいしい作物があることに起因する。本年、前半に被害があったが、後半に柿など被害がなかったのは、おもに野性の餌と柿も豊作で危険をおかして本地まで出て来る必要がなかったと考える。ジムグリの激減とヒバカリの激増は、前年は冷温多雨のためジムグリに最適の環境で、本年は高温で雨が少なかったためと思われる。また、姿を消した“ネズミトリ”の別称のある本邦最大のアオダイショウと神経質なシマヘビについては、天敵か、食物連鎖か、それとも病理か原因がわからない。新たなトウキョウサンショウウオの発見地は、基盤整備し、現在、使用水田として最高位にあり、面積17aで、最初チスイビルが、つぎにイモリが生息するようになった。周囲は、東側水田、西側農業排水路を挟み水田、南側柿・梅・栗の転作田とノウサギ・スズメ・モズなど営巣する寺叢林、そして北側が舗装市道となっている。総じて、生息動物には、動物間もむろん、農業規制が厳しい現状からして、植生と記録づくめの異常気象と災害が大きく影響していることがうかがわれる。

Ⅳ. おわりに

生息動物種数・個体数の消長は、環境の変化を如実に物語っている。かれらは、めまぐるしく変わる自然の営みのなかで、ヒトの脅威にさらされながら、種族維持のため必死になっている。あらためて、詐欺のルツボと化し、経済優先、唯我独尊のヒトの社会と“嘘のない自然”の存在を思い知らされた。そして、同一土俵内で、ヒトと他動物の共存には、空間・時間・食べ物について、立場を互換し考え、さらに自然と生態系維持のため、人為的に破壊・削除した部分は必ず補完する鉄則の確立が痛感させられた。なお、“よみがえれ！ふるさとの森”をスローガンに「鴨川里山を守る会」が平成16年10月に発足したことを付記する。





農業の窓から目撃動物を通して見た自然の移り変わり

眞田 三郎 (鴨川市)

目撃動物は、環境の投影という認識にたち、平成5年から、地の利と農業の特性を活かし、同一エリア(竹平)で、ほぼ同じ仕事をしながら、毎日、目撃した動物を、天気・気温とともに記録している。ここで、平成17年の顕著な変化について述べる。

1. ノウサギの横行

哺乳類の常連は、ニホンザル、ニホンイノシシ、ニホンジカなど12種で、ホンドイタチは見られなかった。本年の著しい変化は、ノウサギが菜花田、畑をはじめ、交通頻繁の県道や住居の多い市道にたびたび出没し、作物を食害している。当地以外でも、県発表・猟期における安房地域の実績は、「獣類ではノウサギが最多で、近年、急速に増加し、農作物への被害が深刻になっている。」の新聞報道が裏づけている。そのほか、台風で倒伏した稲田の地面にネズミと思われる種不明の巣が多数発見された。因みに、平成17年、鴨川市内の有害獣類駆除数は、サル250頭、シカ488頭、イノシシ502頭、キョン136頭である。

2. ウグイスの平地での周年化、ツバメの減少とアルビノツバメとの出会い

鳥類の周年と季節的なものは変わらない。変化は、かつてメジロとともに秋冬に平地に現れたウグイスが、鳴き方と聞く回数に違いがあるが、通年、エリアで聞けた。特に大きな出来事は、ツバメの減少する中で、8月20日、温暖な地へ旅立つためか、3本の電線に止まっている26羽のツバメの中に1羽アルビノが仲間から離れとまっているのが見られた。

3. ヤマカガシの増加と見えぬジムグリ

ここ数年、姿を消したアオダイショウ、シマヘビをはじめ、ニホンマムシ、ジムグリは見られなかった。大きな変化は、ヤマカガシが激増し、幼蛇と多数の轢死体が各地で見られた。反面、ジムグリが姿を潜め、かわりにヒバカリがよく見られた。トウキョウサンショウウオは、昨年と異なる里山に接する水田で、2月21日10時頃、耕起中に1匹みられた。

4. 農業排水路にブルーギルの出現

かつて灌漑用水路には、フナ、コイ、ウナギ、ドジョウ、テナガエビ、ヌマエビ、アメリカザリガニ、シジミが生息していた。しかし、パイプ溜水で、コンクリート排水路となりいなくなった。ところが、6月27日、外国種のブルーギルをみつけてびっくりした。

5. 昆虫類の減少とオニヤンマの飛来

トンボをはじめ昆虫類は、確実に減少している。大きな出来事は、9月10日に10数年姿を消していたオニヤンマ1匹がビニールハウスに入ってきた。アシナガバチの巣は、台風の関係か？瓦下、軒下で、例年、見られる生け垣になかった。そのほか、近年、鳴りを潜めるミズカマキリが、4月19日里山付近の水田で1匹みかけられた。

目撃動物と環境について、生息動物の種類・個体数は、哺乳類を除いて漸減している。本年の天候は、5月の低温、8月後半からの天候不順、2つの台風の直撃と豪雨、年末を控えて観測以来最低の低温で、影響が生息動物にあらわれている。ノウサギの出没は、里山の荒廃、放置田畑の増加と植生の変化で、餌を求め、平地に出て来たと思われる。ウグイスは、四季の壁がゆるみ、習性も徐々に進化したのでは？。ヤマカガシの激増は、最適の環境であったことを立証し、ジムグリの不在は、低温を好む傾向があるのに夏の高温のため、身を潜めたものと思われる。ツバメの減少は、農業の普及や緑地、湿地の消失による虫の減少、人家などの構造や材質の変化による造巣場所の減少が考えられる。ブルーギルの出現は、堰に生息していたものが、豪雨による滴水で排水路に流されたためと思われ、下流の生態系への影響が心配される。結びに、農村の疲弊が自然の荒廃に拍車をかけていることを強調したい。

農業の窓から目撃動物を通して見た自然の移り変わり

眞田 三郎 (鴨川市)

目撃動物は、環境の投影という認識にたち、平成5年から、地の利と農業の特性を活かし、同一エリア(竹平)で、ほぼ同じ仕事をしながら、毎日、目撃した動物を天気・気温とともに記録している。ここで、平成18年の顕著な変化について述べる。

1. 猛威を振るうサル・シカと進出が目立つ哺乳類

哺乳類の常連は変わらない。本年、カヤネズミが姿を消し、同所でイタチが現れた。サルは相変わらず集団で、シカ・イノシシは頻繁に水田へ、ノウサギ・タヌキ・アナグマは畑の農作物を食害している。ハクビシンは農家の物置に、また、ハツカネズミはビニール・ハウス内に分産している。そのほか、アズマモグラ塚は畑、水田の畦道と土手にも多くみられるようになった。(市内有害獣類駆除数:サル335、シカ630、イノシシ1107、キョン217頭。市役所農林水産課調べ)

2. ハシボソガラスの集団移動と激減したツバメ

鳥類の周年と季節的な種類構成はほとんど変わらない。ちなみに留鳥はハシボソガラス・スズメ・キジバトなど19種、夏鳥はツバメ・ホトトギスなど9種、冬鳥はマガモ・タシギ・ツグミなど5種である。なかでもモズは漸増し、ツバメ(初見日4月7日、終見日8月27日)の減少など個体数に変動がある。注目の出来事は、松林の消滅とともに姿を消したハシボソガラスが、1月5日16時30分、50数羽が中継地としてわが家近くの電線と樹木に、また2月19日16時30分ごろ、10数羽が東方へ移動するのがみられた。また、夏鳥ホトトギスの独特な鋭い鳴き声が2月25日朝を皮切りに8月13日朝まで例年になく各所で聞かれた。そのほか、夏鳥ジュウイチの渡来が特筆される。

3. アオダイショウの再現と際立つヒバカリ

爬虫類は、頻度順にヒバカリ・ヤマカガシ・アオダイショウ・ジムグリ・トカゲである。とくに、ここ数年、身を潜めたアオダイショウが6月2日14時20分、農家の庭先で、また、8月7日14時、路上で目撃された。しかし、シマヘビは姿をみせない。本年、最多はヒバカリで、マムシには出会わなかった。両生類は、環境汚染度の指標ニホンアカガエル・ヤマアカガエルをはじめ、ニホンアマガエル・ウシガエルとイモリで生息域は変わらない。個体数は、カエルが減りイモリが増えた。

4. 激減した昆虫類

指標生物セミ類は、初鳴日6月30日、ニイニゼミを皮切りに、ヒグラシ・アブラゼミ・クマゼミ・ミンミンゼミ、終鳴日9月30日、ツクツクボウシで。本年、鳴き初めは例年に比して遅く種間に大差がない。しかも鳴き声が識別できるほど少なかった。蝶類は、モンシロチョウ・モンキチョウ・キチョウ・クロアゲハなど18種で個体数はきわめて少ない。トンボ類は、6月14日のシオカラトンボをはじめ、アオイトトンボ・アキアカネ・ナツアカネ・マユタテアカネとアオハタトンボで散見される程度であった。イナゴ・バッタ・コオロギ類は、コバネイナゴ・ショウリョウバッタ・オンブバッタ・トノサマバッタ・ウスバカマキリ・ヒメギス・エンマコオロギなどで個体数は少ない。ハチ類は、自然度の指標生物キアシナガバチをはじめ、クマバチとミツバチで滅多に会わなかった。

5. ヤマビルとサワガニの出現

最大のトピックは、ヤマビルの出現である。すなわち、ヒルの生息は、すでに噂に立ち、筆者の足下は想定外であった。ところが、7月9日旧墓地を草刈りし、入浴の際、吸血した状態で脱落し唾然とした。そのほか、住宅付近の水田で、7月14日、9月7日の両日、サワガニが発見された。

総括として、哺乳類サル・シカ・イノシシの個体数は増加の一端を辿り、出没頻度と行動範囲が確実に増大している。また、タヌキ・ノウサギ・ハクビシンが人間の日常生活圏に完全に入りこんだ。そのうえ、農作物が次第に彼らの主食に、農業排水路が高速道路化している。反面、他種動物の個体数は明らかに減少した。背景に、5~8月の天候不良(例:5月の日照時間が千葉など6か所で同月の最小値更新)が、各種生物のバイオリズムをくるわせ、生物間に連鎖反応を起こしたと思われる。問題ヤマビルは、生息環境の醸成と先行哺乳類との食物連鎖に起因し、今後の蔓延が懸念される。

農業の恵から日常動物を通しての自然の移り変わり

真田 三郎 (鴨川市)

目撃動物は環境の象徴という認識にたち、平成5年から、地の利と農業の特性を活かし、同一エリア(鴨川市竹平)で、ほぼ同じ仕事をしながら、毎日、目撃した動物を天気、気温と共に記録している。ここで平成19年の顕著な変化について述べる。

1. 猛威を振るうサル・シカ・イノシシと進出の目立つタヌキ・ノウサギ

哺乳類の常連は変わらないがイタチとカヤネズミには会わなかった。獣類の被害は「NOSAI ぼうそう」によると水稲共済災害額の75.6%を占めている。その他、タヌキが農家の母屋床下に巣をつくり、ノウサギが平地の水田畦道を通るなど活動域が拡大の一途を辿っている。(鴨川市内駆除数:サル326、シカ706、イノシシ843、キョン322、農水課調べ)

2. スズメ・モズの増加と水鳥の激減

鳥類の周年と季節的種数は、ほとんど変わらない。ちなみに留鳥はハシブトガラス・スズメ・トビなど22種、夏鳥はツバメ(初見4/6、終見10/3)・ホトトギスなど3種、冬鳥はタヒバリ・ツグミなど4種である。目立つ変化は、ツバメの10/3目撃と里山の荒廃に伴う竹藪の拡大でスズメとモズが増え、スズメの被害が増大している(60Kg/10a減収)。また、かつてカモなど水鳥が大挙して渡来し、格好の猟場だった堰には、付近の宅地造成、水質の変化、水草繁茂と食物減少のためか、ほとんど見られない。反面、カルガモが前年まで皆無の水田や畦道で一時期頻繁に出没した。その他、ハシボソガラス数十羽が前年1/5夕、電線上で、本年は11/10午後1時頃、水田で、しかも数日間滞留し、落花生畑を荒らし、柿を残らず食害して、その後、いずこへか飛び去り、来年の行動が懸念される。

3. ヒバカリの激増とヤマカガシの増加

爬虫類は、頻度順にヒバカリ・ヤマカガシ(初見5/7、終見11/1)・カナヘビ・アオダイショウ・トカゲで、ヤマカガシの轢死体が著しい。前年、久方ぶりに他所で再現したアオダイショウが7・8月の2回、わが家物置の犬走りで見られた。そのためか、この間ネズミは見られなかった。しかし、シマヘビとマムシは依然として姿を消している。両生類は、環境汚染度指標のニホンアカガエル・ヤマアカガエルをはじめ、ニホンアマガエル・ウシガエルとイモリで生息域は変わらない。しかし、イモリを除き卵塊数を含め個体数は減少している。

4. 減少を濃める昆虫類

指標生物のセミ類は急減し、初鳴7/9のニイニイゼミを皮切りにアブラゼミ7/9・ヒグラシ7/16・ミンミンゼミ7/29・ツクツクボウシ7/28で、終鳴は10/15のツクツクボウシである。鳴き初めは、順序性が崩れ、きわめて遅く、種間も迫り、夏の風物詩である合唱もなく、個々の声が識別できるほど少なかった。原因は天候不良と低温の影響と思われる。蝶類は、種数と個体数の減少が続いている。初見はモンシロチョウの3/4、終見は12/2で、頻度順はモンシロチョウ・キチョウ・アゲハ・クロアゲハ・キアゲハ・アオスジアゲハ・モンキアゲハ・ジャコウアゲハ・シジミのなかまで、キチョウとアオスジアゲハの増加が際立つ。トンボ類は、5/20初見のシオカラトンボを主役にアオイトトンボ・マユタチアカネ・アキアカネ、終見は11/21のハグロトンボやナツアカネは1回しか見られなかった。イナゴ・バッタ・コオロギ類は、オンブバッタ・コバネイナゴ・ショウリョウバッタ・カマキリ・クビキリギス・トノサマバッタ・ツチイナゴ・クサキリ・ウマオイムシ・エンマコオロギなどで個体数は少ない。

その中でカマキリは漸増した。ハチ類は、自然度の指標生物のアシナガバチをはじめ、クマバチとミツバチで、巣は見当たらず個体数が漸減している。そのほか、甲虫類のホタルは少なく、ナナホシテントウが散見される程度であった。

総括して、生息生物は、絶えず自然と環境の微妙な変動に、種族と個体保持のため、鋭敏に反応し進化している。改善には人のエゴ、開発とアフターケアのバランスが課題と考える。



農業の窓から目撃動物を調べての自然の移り変わり



真田 三郎 (鴨川市)

筆者は、地の利と農業の特性を活かし、毎日、目撃した動物を記録している。今回、平成20年1月1日～8月25日（以後、作業中事故で入院）の著しい変化について述べる。

* 警戒心が薄らぐほ乳類とヤマビル *

市農林水産課調べによると、平成20年市内有害獣類駆除件数1852頭（サル286、シカ647、イノシシ709、キョン210）が示すように、当地（竹平）も農作物の被害は大きい。そのなかで、ハクビシンのミイラ化した死骸が農家の物置2階で、常連のタヌキ、アナグマ、ノウサギ、アズマモグラ、クマネズミ、ハツカネズミの活躍、また、カヤネズミの宙吊りの巣2個が同一水田内で近接するイネの中で発見された。動向をみると、かつて人の気配で逃避した彼らが最近では余裕をもってわれらを見つめ、ときに動物によっては威嚇行動に転ずることもある。最大の出来事は、休耕田に植栽のウメを下刈りし、棒で叩いて収穫中、樹上落下と思われるヤマビルが葉とともに襟首にいたので愕然とし、食物連鎖による分布域の拡大をまさに肌身にした。

* アオサギ、カルガモの定着と移動中の水鳥の大群の飛来 *

常連のトビ、ハシブトガラス、ヒヨドリ、ムクドリ、キジバト、スズメ、モズ、ウグイス、ホオジロは変わらない。夏鳥ツバメ、キビタキ、ジュウイチ、ホトトギス、コルリ。冬鳥ツグミ、マガモ、スズガモ、タシギ、その他ヒバリ、コサギ、コジュケイ、カケス、ハクセキレイ、フクロウ、キジ、メジロ、カワセミなどである。本年は、本邦で見られるサギの仲間では最大のアオサギと、カルガモが定住した。また、3月24日、日没に3haの堰一面が移動中の水鳥に覆われ、翌朝までに逗留中のスズガモ、マガモとともに飛び去った。

* 姿を見せぬシマヘビとダルマガエル?の出現 *

爬虫類はヤマカガシ、ヒバカリ、ジムグリ、マムシ、トカゲ、カナヘビで、前年再現のアオダイショウ（キワタリ）が物置の樋を渡る场景を久しぶりに見た。しかし、シマヘビは依然として姿を見せない。両生類はニホンアマガエル、ニホンアカガエル、ヤマアカガエル、ウシガエル、トウキョウサンショウウオ（バナナ状卵塊）、ニホンイモリで、カエルはやや減少し、イモリが増加している。そのほか、初顔のトウキョウダルマガエル?が水田の耕起中に突然飛び出したが捕獲に失敗し、種の確認はできなかった。

* 減少する昆虫 *

チョウ類は、キチョウが目立ち、モンシロチョウ、モンキチョウ、アゲハ、キアゲハ、カラスアゲハ、クロアゲハ、ジャコウアゲハ、アオスジアゲハ、ベニシジミなどである。トンボ類は、シオカラトンボを主役に、マユタテアカネ、ナツアカネ、ハグロトンボとイトトンボの仲間では個体数は少ない。セミ類は、ニイニイゼミ、アブラゼミ、クマゼミ、ヒグラシ、ミンミンゼミ、ツクツクボウシで、初鳴きは7月7日である。バッタ類はクサキリ、クビキリギス、ウマオイ、ショウリョウバッタ、オンブバッタ、トノサマバッタ、コバネイナゴ、オオカマキリ、ウスバカマキリで少ない。ハチ類は、アシナガバチ、ミツバチ、クマバチで巣は見あたらず、個体数も極めて少ない。そのほか、カブトムシが8月19・24日、家の中とビニールハウスに飛来したことが特筆される。

生息動物の消長は、バックグラウンド、すなわち、過去から現在までの土地利用の変化と地域住民の暮らし方を端的に反映している。

農業の窓から目撃動物を調べての自然の移り変わり

眞田三郎(鴨川市)

今回、体調不良のため、家族の協力で調べ、平成21年の主な動向について述べる。

1. 拡大する獣類の活動域

哺乳類の常連はカヤネズミを除いて変わらない。本年は、今までノウサギの食害に悩まされていたサツマイモ畑が、7月14日、イノシシによって一夜で全部掘り起こされた。また、集落内の畑にキョンの足跡が、外側の二毛作レタス田にはニホンジカの糞が、さらに続く水田地帯先端にある野生ビワの木にはニホンザルが望見された。そのほか、近所の農家では、犬の散歩中に犬小屋にホンダヌキが入り込んでいたというハプニングが。また、平地の広大な水田地帯の一角で稲刈り中に株間から大タヌキが現れ、悠然と立ち去る。

(駆除数:サル299、シカ858、キョン238、イノシシ995、市農林水産課調べ)

2. 距離が縮む鳥類

鳥類は、留鳥27種、夏鳥5種、冬鳥5種でカワウが堰で確認された以外は変わらない。その中でも異変が2つ。1つは、かつてモズの数は少なく、時々ま里山の縁辺で鳴き声が聞かれる程度であった。最近、数も増え農家の敷地内で頻繁に声を聞く。4月26日、けたたましい鳴き声につられて行くと、幼鳥がビニールハウス内に紛れ込み、うろたえていた。2つは、ツバメは建築様式、用材等の変化で営巣場所が縮減され減少傾向にあった。例年、渡りを前にして8月末、ほぼ同じ電線に20数羽が集結する。ところが、本年、原因は定かでないが、飛び交う騒々しさを反映し78羽を数え明らかに増殖した。

3. 轢死体が目立つヘビ類

爬虫類は、ヤマカガシ、ヒバカリ、アオダイショウ、ジムグリ、ニホンマムシ、ニホントカゲ、ニホンカナヘビで前年に比しマムシが増えた、しかし、シマヘビは依然として姿を見せない。最大の変化は、ヤマカガシ、ヒバカリを中心に轢死体が急増したことである。

4. 犬小屋にヒキガエル出現

両生類は、ニホンアカガエル、ニホンアマガエル、ヤマアカガエル、ウシガエル、ニホンイモリである。7月25日夜、犬の異常な吠え声で犬小屋を覗くと、数年間見られなかったニホンヒキガエルが犬と対峙していた。また、12月20日、畔切り中、新たな場所でトウキョウサンショウウオが発見された。そのほか、轢死体は主にカエルで降雨後に多く、特に初のイモリ2例が注目される。

5. 異常気象直撃のセミ類

昆虫をみると、セミ類は、ニイニイゼミ、アブラゼミ、ヒグラシ、ツクツクホウシ、ミンミンゼミで、夏の異常気象をまともに受け数は少ない。出現はやや遅れて順序が乱れ、かつ活動期間も短縮された。そのほか、ショウジョウトンボの群飛が、減少危惧種ミツバチが11月9日、ヤツデの花に、初めてオオカマキリの轢死体2例が目をはく。なお、イネの害虫クモヘリカメムシの多発が報じられたが、当地も例外ではなかった。

総括して、生息動物の活動域の拡大、多種に及ぶ轢死体の急増が目立つ。この現象は、都市化に伴い長年保たれたバランスにずれが生じたことを象徴している。

農業の窓から目撃動物を調べての自然の移り変わり

真田 三郎 (鴨川市)

平成 22 年は、体調不良のため、家族の協力で、主に、土・日にスポットを当て調べた。

際立つモグラ塚

有害獣類の活動は、鴨川市産業振興課によると駆除件数が 3,280 件(サル 426、シカ 878、イノシシ 1,395、キョン 581)。「NOSAI ぼうそう」による稲作被害の 90%を占めていることからして、当竹平を含め衰えていない。活動域は、里山の手入れ不足、周辺農耕地の放置増加に伴い、平地の水田地帯へ深く進出し、食害や“ぬた場”が見られるなど拡大を続けている。そのほか、畦道にモグラ塚が際立ち、孔道による崩壊が懸念される。

変わったツバメの動き

鳥類は、周年見られるハシブトガラスなど常連は変わらず留鳥 28 種、夏鳥ホトトギスなど 5 種、冬鳥ツグミなど 10 種、旅鳥シマアジである。夏鳥ツバメは我が家へ 4 月 10 日に渡来した。すでに巣は、2 棟の出入り自由で安全な通りと軒に造られ、新旧 2ヶ所ある。本年も例年どおり営巣されると思った。しかし、期待は見事に裏切られた。原因として、長い間、影を潜めていたアオダイショウが一昨年に見られたことが考えられる。今後の推移を見守りたい。また、毎年、8 月 28 日頃、新しく生まれた鳥を含め集結し、渡りにつく。本年は、猛暑の影響か 9 月 4 日、4 羽が鳴きながら、我が家に飛来した。

気になるシマヘビの行方

爬虫類は、多い順にヤマカガシ、ヒバカリ、ジムグリ、アオダイショウ、ニホンマムシ、ニホントカゲ、ニホンカナヘビである。その中で、長い間、姿を見せていなかったアオダイショウが、最近現れた。しかし、かつて 3 本指に数えられたシマヘビは、依然として影も形も見られない。そのほか、ヤマカガシ、ヒバカリの棒死体が相変わらず多く目立つ。

メンバー交代のカエル

両生類は、昔の水田では代表的だったツチガエル、トノサマガエルが、圃場整備、農法の変革などで姿を消してから久しい。現在、脇役のニホンアカガエルを主体に、ヤマアカガエル、ニホンアマガエル、ニホンガマガエル、アズビヒキガエルと外来種のウシガエルから成っている。本年、新たにトウキョウダルマガエルが、川近くの田圃で発見された。その他、ニホンイモリは、路上の棒死体が象徴するように増加傾向にある。背景には生息環境の安定化、すなわち、放置水田の増加と常態化が考えられる。

台頭したケラ

昆虫類では、畦切りの際よく出てくるケラが、舗装道路上で蝶死体を含め、一度ならず見られ、明らかに増加している。また、セミの鳴き声は、毎年、里山を中心に聞かれる。ところが 10 月 4 日、集落中央で、ツクツクボウシが突然鳴き出し、わが耳を疑うと共に、分布の広がりを強く感じた。そのほか、ハチ類とチョウ類は、年々、減少している。

総括して、一見、ケラの台頭、モグラ塚の増加、ノスリなどの飛来はばらばらであるが、自然界における食物連鎖の一側面を如実にものごとがたっている。また、農業の盛衰が、自然環境の変化をもたらし、かつ、生息動物の消長に大きく反映されていることがわかる。

農業の窓から目撃動物を調べての自然の移り変わり

眞田三郎（鴨川市）

平成23年は、家族の協力のもと、リハビリで利用する道路を中心に定期的に調べた。

○横行するタヌキとモグラ塚の広域化

哺乳類の獣害は、「NOSA I ぼうそう」によると、共済支払額の7.5割を占め、市産業振興課調べの市内駆除数は、サル400、シカ992、イノシシ1,837、キョン777頭を示し、当竹平も活動はエスカレートしている。反面、人に対する警戒心は極度に低下した。タヌキは親子連れなど路上の足跡は、夥しく至る所で見られ、ノウサギの被害も話題となる。畦畔のモグラ塚は拡大し、崩壊も進み、生態上、対策に苦慮している。

○大集結の2鳥類

鳥類は、留鳥27種、夏鳥4種、冬鳥5種で、例年とほとんど変わらない。夏鳥ツバメは、わが家へ4月3日に渡来し、南回帰は8月27日である。前年、アオダイショウ出現のためか、使われなかった古巣を嵩上げし、2回の巣立ちが行なわれた。目立つ出来事は、12月3日16時頃、ムクドリ約300羽が、また、12月7日同時刻頃、ハシブトガラス78羽が電線上に大集結して異様な様相を呈し、近づいても逃げ出す気配がなかった。

○ビクリ毒蛇の轢死体

爬虫類の種類は変わりなく、ヒバカリが増加している。問題のシマヘビは、本年も姿を現わさない。轢死体は、幼蛇を含めヤマカガシ、ヒバカリが主体で常態化している。その中で7月12日、最も交通量の多い民家の間の路上でニホンマムシの轢死体に遭遇した。近所の人によると、宅地内でも見られたとのこと人畜への危害が懸念される。

○初目見えサンショウウオの轢死体

両生類の種類は例年通りで、ウシガエル、ニホンイモリ、トウキョウサンショウウオの分布が漸増している。轢死体は主にカエルでイモリも見られた。特に、10月22日、サンショウウオが同一地点の道路両側で、朝夕各1体ずつ、また、他日で2例見られた。

○セミの異変と昆虫の交通事故

昆虫類のチョウは、年々減少している。日本自然保護協会の全国一斉調査で、対象13種のうちモンキアゲハ、アオスジアゲハの2種を確認した。セミ類は天候不良のため、個体数は少なく、初鳴きは7月14日、終鳴きは10月12日で、夏の風物詩である合唱は聞けず、出現順もミンミンゼミとツクツクボウシが逆転するなどリズムに異状を生じた。昆虫の轢死体は、ショウリョウバッタ、オンブバッタが最も多く、クサキリ、トノサマバッタ、カマキリなどが見られた。予想外は、10月6日のアキアカネである。

○ミミズの異常行動

環形動物ミミズ（4～10cm）が、6、7月を中心に5月から11月まで、路上の諸処に天気にかかわらず出没し、多い日は轢死体を含め44匹にのぼった。この現象は、モグラ塚との関連性があるかもしれない。

総括して、分布状況は、地域住民と生息動物の棲み分けが崩れ、混在化が一段と進んだ。象徴として、交通事故が多発し、轢死体も種類、個体数と共に急増している。最大の要因は、農業の衰退と車社会への急変が考えられる。今後、「どう共存するか」が、課題となる。

農業の窓から目撃動物を調べての自然の移り変わり

眞田三郎(鴨川市)

筆者は、家族の協力のもと、毎日リハビリで利用する生活道路を中心に目撃動物を調べている。以下、平成24年の主な変化について述べる。

○跋扈する獣類

獣害は、「NOSAIぼうそう」によると、水稻損害支払額の約8割を占め、市産業振興課調べの市内駆除数は、前年より増えサル527、シカ1,073、イノシシ1,910、キョン841頭で、当地竹平も例外でない。ちなみに、里山の縁辺でシカの白骨死体、響き渡るキョンの鳴き声、集落中心地でイノシシの掘り起こし、サルの集団による畑荒らし、ノウサギの轢死体、夥しいタヌキなどの足跡、モグラ塚の増大が裏付ける。

○ウサギに群がるカラス

鳥類は、留鳥27種類、夏鳥4種、冬鳥6種でほとんど変わらない。その中で、ハシブトガラスは増加し3月24日、路上でノウサギの轢死体に群がる集団に遭遇。全国的に減少が伝えられている夏鳥ツバメは、我が家へ3月29日に渡来。前年2回巣立ちの巣に営巣したが、巣立ちは1回で終わった。例年、南回帰のため集結する電線には8月27日、16羽と少ない。

○絶滅か？シマヘビ

ヘビ類は、アオダイショウ、ヤマカガシ、ヒバカリ、ジムグリ、ニホンマムシで、本年も問題のシマヘビの姿はない。轢死体は、幼蛇を含めヒバカリが増加しヤマカガシと並ぶ。

○多発する両生類の交通事故

両生類は、ニホンアカガエル、ヤマアカガエル、ニホンアカガエル、ニホンイモリ、トウキョウサンショウウオでウシガエルの分布が広がる。轢死体は、生息数に比例し全種に及ぶ。とくに、カエルの幼体が集団で道路を横断中の93体は目立つ。

○減少する昆虫

セミ類は、種に変わりなく数は少ない。初鳴きは7月12日のニイニイゼミで終鳴きは10月6日のツクツクボウシである。この間、天候不良で一時的にヒグラシの影は薄い。

ハチ類は、アシナガバチが数回現れたが巣は見あたらない。トンボ類は、主にシオカラトンボでマユタテアカネ、ナツアカネ、アキアカネ、イトトンボと少ない。チョウ類は、モンシロチョウが激減し、大部分がキチョウ、ベニシジミ、ヤマトシジミ、ヒメジャノメ、アカタテハで、時たまアゲハ、キアゲハ、カラスアゲハ、アオスジアゲハも見られた。轢死体は、動きの鈍いショウリョウバッタ、オンブバッタ、カマキリで、希に、トノサマバッタ、コバネイナゴも見られた。

○分布一致のミミズとモグラ塚

路上のミミズ(5~20cm)は増え、それに伴って路傍のモグラ塚も拡大している。そのうえ、分布が重なり食物連鎖の側面を如実にもの語っている。

総括して、地域住民と生息動物との間で、自然を介してバランスのくずれ、生活のギャップが浮き彫りにされ、かつ、動物内でも適応度により消長が鮮明になった。今後、共生のための対応が急がれる。

寄稿「動物調査」

農業の窓から 目撃動物を調べての自然の移り変わり

眞田三郎（鴨川市）

筆者は、家族の協力のもと、毎日リハビリで利用する生活道路を中心に、目撃動物を調べている。以下に、2013年の主な変化について述べる。

○勢いを増す野獣

獣害は、「NOSAI ぼうそう」によると、水稻損害支払額の約7割を占め、市農水商工課調べの市内駆除数は、前年より漸減し、サル 300、シカ 1,053、イノシシ 1,430、キョン 823頭で、当地竹平も例外でない。その中で、キョンが急増し、懸念されたサルの集団もとうとう集落の中央部で、交通量の比較的多い我が家まで進出し、初めて被害が出た。また、アズマモグラとハタネズミが目立つ。そのほか、隣の集落の独居老人留守宅では、屋内に野獣が侵入し、荒らされ、業者によって短期間に、アナグマ（3連続）、テン、タヌキ、ハクビシン、アライグマの順で連続的に捕獲されたことは注目に値する。

○ハウスにハト

鳥類は、留鳥 22種、夏鳥 5種、冬鳥 6種でほとんど変わらない。その中で、キジバトがハンターの不在に伴い年々増え続け、農家の各所に頻繁に飛来し、作物に被害を与えている。5月10日、ビニールハウスに紛れ込み、出口を見失い、狼狽するハプニングも一端を物語っている。一方、全国的に減少が伝えられている夏鳥ツバメは、4月14日渡来し、昨年の巣に営巣したが、巣立ちは1回5羽で終わった。例年、南回帰のため終結する電線には、8月28日、8羽と少ない。

○サトイモ畑に卵

爬虫類は、アオダイショウなど7種で、シマヘビの姿はない。印象的な出来事は、路上で初めてニホンカナヘビに遭遇。これを裏付ける如く10月3日、隣家、路傍のサトイモ畑で、根元の土中に白色鶏卵型の卵を3個見つけて持参し、観察中、突然、1個が孵化し、7cm ぐらいの幼体が現れるという千載一遇のチャンスに恵まれた。轢死体は、幼蛇を含め、広範囲にわたりヤマカガシが多く、ヒバカリ、アオダイショウが続き、毒蛇のニホンマムシも1体見られ、通学路のため、注意を喚起したい。

○殖えるアマガエル

両生類は長い間、姿を消していたアズマヒキガエルが、8月16日に稲刈り中、再び現れた。轢死体は、この1・2年、急増したニホンアマガエルが幼体を含め大半を占め、しかも、広範囲にわたる。ニホンアカガエル、ニホンイモリは漸増し、トウキョウサンショウウオも2体見られた。

○殖えるミミズ、広がるモグラ塚

環形動物ミミズ（5～20cm）の増加は著しく、路上では轢死体を含め到る処で周年みられる。連動して路傍のモグラ塚の分布も拡大を続けている。

総括して、農家と生息動物の関係は、農作物に対する直接被害に加え、間接被害として食物連鎖に起因するヤマビル蔓延と畦畔の崩壊が頭痛のたねになっている。

眞田三郎氏からの寄稿文「農業の窓から見た自然の移り変わり」は、1996年6月から18年に亘り調査を継続して投稿いただいています。今までの原稿を纏めて、自然観察ちばHPの行事報告（記事）の目次画面でみられるように掲載しました。

1996年12月、1998年7月、1999年7月、2000年9月、2001年3月、2002年3月
2003年3月、2004年3月、2005年5月、2006年5月、2007年3月、2008年3月
2009年9月、2010年5月、2011年1月、2012年5月、2013年3月